



ワルシャワ猫物語

工藤久代

文藝春秋

〔著者紹介〕

東京・浅草に生まれる。一九四二年、日本女子大学附属高女卒業。四九年、梅田良忠（のち、関西学院大学教授）と結婚。良忠死没に伴い六一―六五年、NHK音楽資料課嘱託。六五年、工藤幸雄（現、多摩美大教授）と再婚。六七年からワルシャワ大学日本学科講師を務めた夫とともに同地に七年間滞在。七五年、帰国。著書に『ワルシャワ貧乏物語』（鎌倉書房）がある。

住所 〒182 東京都調布市入間町
317-28 アトリエXV-B

ワルシャワ猫物語

一九八三年五月二十五日 第一刷
一九八三年九月三十日 第四刷

定価 一〇〇〇円

著者 工藤 久代

発行者 半藤 一利

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-1-13
電話 〇三（二六五）二二一

印刷 精興社
製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

はしがき

誰でも幼いころから、何かのかたちで生きもののつき合いがあるはずです。

幼少のわたしの記憶につよく刻まれた生きものは、犬でした。下町の縁日で物めずらしさから、ひよこ、二十日ねずみ、りす、モルモット、うさぎをねだっては、飼ううちに死なれて泣きを見る、そんなことのくり返しのあとで、犬がようやくわが家の姉弟たちの遊び相手になったといえます。

つぎつぎに飼われたなかで、小学三年のとき、愛犬が死にました。わたしは泣きに泣いてもまだ心が晴れず、あくる日の明け方、しょんぼりと「エスの死」という作文をつづりました。自分のために書いたつもりのを担任の先生にだけ読んでもらったのに、どうしたわけか「土堤の若草」という校内誌にのりました。わたしの書いた文字が活字で印刷された、あれは記念すべきものだった、と今思いかえしているところです。

大の犬好きだった父は、そのころでいう「日支事変」の始まった当時、ボビーと呼んでいた中型の青島シェパードが死んでのち、ブツリと犬を飼わなくなりました。

動物のすべてに目のない父は、上野の動物園には二、三カ月に一度ぐらいの割でこどもたちを

連れて行ってくれました。また、動物映画は必ず浅草の大勝館まで見に行つたものです。だからワイズミューラーのターザンものは、たぶんのこらず見ているはずですよ。わたしの覚えているいちばん古い動物映画は「ザンバ」という象物語でした。いまでもテレビの動物ものから目が放せないのは、きっとこんなせいかと思っています。

さて猫の話です。わが家と猫とのつき合ひは、疎開先きからもどつた姉が大切に連れてきた金目銀目の雌猫に始まります。この金目銀目に生まれた仔は赤トラの雌で、これが母の溺愛するところとなります。この二匹は季節のたびごとに競つて仔を生み、わが家は次第に猫屋敷の觀を呈してゆきました。

わたしは、離れの茶室を勉強部屋にしていたので、甘やかし放題の猫たちがわがままをしつゝす母屋の猫さわぎからは安全でいられました。

わたしの「猫学入門」は、デカと呼んだ雌の野良猫を知つた時からです。ひとまわり図体の大きなこの黒白のブチ猫は、母から外猫の扱いを受け、食べものだけはもらっていました。

ある日、デカが三匹の仔猫をわたしの離れに連れてきました。仔猫は一カ月ほどの大きさ、毛糸玉のような可愛い三匹のために、わたしはあがり口にミカン箱を置き、そこに毛布を敷いてやりました。

デカのみごとな子育てぶり、わたしの「猫学入門」です。仔猫の餌の第一回分は、焼跡の原っぱからくわえてきた野ねずみの袋児でした。親指ほどにちいさなピンク色の生き餌を、やさしいのど声ですすめながら食べさせる——その様子は、わたしが、生きものの親の不思議さに触れ

た初めのように思われます。

袋児の段階が終ると、次には生まれたての小さなねずみを運びこみます。こうして仔ねずみのサイズは仔猫の発育に応じて着実に大きくなってゆき、わたしはますますデカの知恵に目を見はりました。

三匹の仔猫を初めて庭へ誘導する時のなんともいえないデカのやさしい声。錦木にしぎの根元に誘いよせたあとは木登りの授業です。はじめはほんの四、五歩よじ登ってから後ずさりにおりる仕草を、これもくぐもり声でなきながらいくどもいくどもくり返します。やがて仔猫は母親をまねて木に爪をかけ、すべったり転げ落ちたりしながら、何日もかかったすえ、木登りができるまでになりました。

あるときから、きっぱりと乳をふくませるのをやめたデカの子離れの厳しさは、二十一歳のわたしに、生きものの姿、女の運命、いのちの重みについて考えさせる機会となったと思います。

デカは三回、このように子育てをくり返し、その後、不意に姿を消しました。内猫うちねことちがって、この猫には凜りんとした野生の猫族の風情がありました。(幸せにもデカ親子四匹と写したわたしの写真が一枚だけのこっています)

チャルと名づけた雄猫とのつきあいは、まだ戦後まもないころ、先立たれた夫と過した田舎ぐらしの三年間のことでした。雄猫には雌猫とちがった特別な個性の魅力をわたしは感じとったものです。この本の中扉の裏に掲げた詩からは、夫とチャルの交わす愛情のまなざしが見えてくるようです。

猫に対する夫の可愛がりかたはいっぷう変っていました。ボーランド式だったのか、とわたしはワルシャワの七年間に思い当ります。彼自身、第二次大戦までの十七年を、そこに過したのでした。久しぶりの日本の田舎ぐらしで夫は、ワルシャワで出会った猫への思いをチャルに向けていたかと、今ようやく理解できます。

わたし自身が十六匹の猫たちとつき合ったワルシャワぐらしについて、このような本を書こうと思い立ったのは、ひとつには別れた猫たちへの愛惜からでしょうが、猫とのかかわりを通じて見たあの街の普通の人びとの気どころも知ってほしいからでもあります。

きらいないいかたですが、ペット時代といわれ、猫ブームと呼ばれる半面、団地で猫さえ飼えないきまりのある日本のあり方に、ちょっととした反撥心も手伝っているのかもしれない。作文「エスの死」のつづきほどに、あまりにも私的な「ワルシャワ猫物語」ながら、わたしなりに精いっぱい書いたつもりです。人間をふくめた生きもののいのち、くらし、そしてこころについて、この本のなかから何かしらを感じとっていただければ幸いです。

これからそれぞれの人生を歩もうとする若い人たち、ことに少女たち（かつてわたしもそのひとりでしたが）には、ぜひとも読んでもらいたいと願っています。

ワ
ル
シ
ヤ
ワ
猫
物
語
＊
目
次

はしがき 1

オコポーヴァ 45

アパートの人たちと環境 12

心の救い——チャルとの出会い 17

好奇心といはずら 23

ゲッター跡の原っぱ 31

野良猫と老人たち 35

小さな銀の鈴 42

スタシエクの悪事 47

庶民のための動物病院 51

空中の大冒険 60

嫁さんがし 67

トマトの好きなナホ 73

夜なかすぎの家出 79

シレナ 32

新しい家で 86

目利きの梶山さん 93

出産のドラマ 98

「メンデルの法則」とは？ 105

育ちざかり遊びざかり 111

スパツェルはお散歩 119

仔猫の片づくまで 122

文盲の女ゾシアのこと 126

復活祭のごちそう 132

広告——黒猫を「善き手」に 136

ナホの親心 140

チャル失踪の衝撃 146

カルヴィンスカ 48

庭つきの長屋が五十ドル 158

おおみそかの夜 161

チャビと焼海苔の匂い 168

月夜の恩返し 174

ノミが有料なら猫はただに 181

目でこたえながら死んだチャビ	187
太郎が戻らない	194
二度目の受難	201
形見の花はクレマチス	209
花子と太郎のこどもたち	215
郵便配達と「温室成金」	221
雨の日の別れ	230
おわりに	236
あとがき	239

装画・イラスト 土山芙沙子

ワ
ル
シ
ャ
ワ
猫
物
語

ちやるに

ほかのことをかんがえたり

よその方をみたりしているとき

まるい眼をはそめ

したから うかがうように

おまえは わたしの眼をのぞきこむ

わたしは それをみないけれど

眼をのぞきこまれていることを知っている

しかし ときに わたしも

その眼を ふとみかえすことがある

おまえは ひげをふるわせ

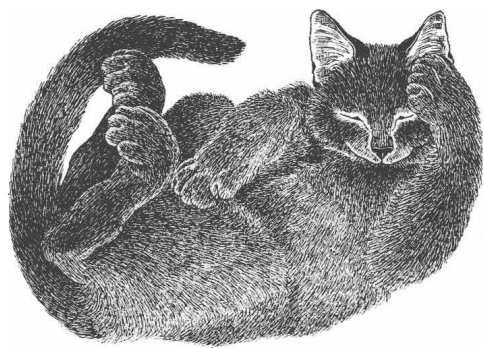
まぶしそうに 下をむくか

眼をはそめたまま

視線をそらしてしまうかする

梅田良忠詩集『ちいさいものたち』(一九六〇年刊)より

オ
コ
ポ
ー
ヴ
ア
45



アパートの人たちと環境

アパート管理人のことをポーランドではドゾルツァといいます。フランスのコンシエルジュ（門番）と似た制度かも知れませんが、社会主義国のポーランドでは、ドゾルツァはれっきとした国家公務員です。アパートのバルテル（地面に接している階）つまり普通いうところの一階に、他の住民と同じ面積の居住部分を与えられ、月給が支払われます。給与の対象となる仕事は、第一にアパートの公共部分、つまり出入口、エレベーターや階段などを常に清潔に保つことです。

雪が降る季節には、アパートの出入口から道路までの雪かきもドゾルツァの仕事です。アパート内の事故や、急病人の救急連絡なども管理人役として面倒を見なければなりません。

アパートの最上階にある洗濯室、乾燥室も公共部分です。ここの鍵はドゾルツァがしっかり握

っています。煮洗いの大洗濯をしたい時には、前もって洗濯室の使用をドゾルツァに申し入れ、鍵を受け取るシステムになっています。

ドゾルツァには、週二回まわってくる清掃車にゴミを運びこむ労働もあります。ワルシャワの大アパートのゴミ処理は、ほとんどがダストシュート方式です。エレベーターのある公共部分に投げ込み口があります。百軒近い入居人が、たった一カ所しかないこのゴミ捨て場に、生ゴミ、ガラスびんの分別もしないまま投げこみます。ガタンと鉄製のフタを押しあげてほうりこみますが、ビニール袋ならぬ紙袋に入れただけのびん類は、途中ダクトの壁にぶつかって砕け、がらがらっと大きな音をたててはるか階下に落下してゆきます。ビニール袋が足りないから生ゴミも紙袋入り、集中室に落下するまでには袋は破れてしまいます。このダストシュートの終点のゴミ部屋のきたなさ、くさはちよっと口ではいいあらせません。

清掃車に運びこむのはドラム缶より大きな金属製のゴミ容器です。このゴミ容器にくさくてきかない雑多なゴミをつめ直す作業は、ドゾルツァにとって一番つらい仕事であろうと、気の毒に思ったものです。

わたしたちが最初に住んだこのアパートは、ワルシャワ市の西方を走るオコボーヴァ通りという幹線道路に直接面した十二階建ての大きなものでした。北隣りが今は訪れる人となないユダヤ人墓地です。地図で見ると、このユダヤ人墓地はオコボーヴァ 45―51 と番地が記入されています。

わがアパートはオコポーヴァ45で、ユダヤ人墓地との間の47番地は五百坪くらいの、ただの原っぱになっています。西には四階建ての小ぢんまりしたアパート群の向うに新教のエヴァンゲリン墓地（ふつうドイツ人墓地といわれている）の深い緑が見られます。

東向きの窓からは、こわれたままの工場がひとつボツンとあるだけの数千坪の原っぱがひろがっていて、人々が通って自然にできた道が対角線にクロスしています。この原っぱの向うがもとのユダヤ人ゲットー跡、ワルシャワ市内でもまったくの廢墟となった地域です。一九四五年当時の写真集で見ると、たったひとつ残ったムラノフの聖アウグストス教会以外、見渡すかぎり瓦礫だけになった地帯なのです。戦後、復興の手がまっ先きにつけられたところで、瓦礫を郊外に運び出す手だてもないまま、一メートル近い瓦礫の積み重ねがアパートの土台となったということです。

わがアパートが、こうした意味で、どんなにすごい所に建てられていたか、それはずっと後になってわかることになります。われわれが入居したとき、建築されてからすでに三年経っているというのに、外壁はコンクリートの打ち放しのまま、他のアパートのように塗装されていないので、なにかすさんだ感じを受けました。隣の地区のヴォーラの工場地帯に通う労働者が多いせいか、エレベーターの中のいたずら書きや、出入口のホールのよごれかなどからみても、あまり品のいいアパートとはいえませんでした。